【エッセイ】

漱石が逆立ちをする可能性

――言語時評・十――

工藤力男

十一月廿六日廿三時、ラジオ第一放送のニュースは、大分市におけるある政治家の講演について報じた。先の衆議院議員選挙で自民党が大勝したが、次の国政選挙には「逆風が吹く可能性がある」と話したという。一切の文脈がないこの文言から、読者はどんな人を思いうかべるだろうか。わたしの直感は野党の政治家であるが、これはじつは森喜朗前首相なのである。発言の実態が知りたかったが、翌日の新聞では判明しなかった。

「可能性」は不思議な語である。これについてすぐに思い出されることが二つある。ひとつは一年前、ある出版社代表のＩ氏から届いた数点の文書である。Ｉ氏は、一昔前にも、基礎日本語の成立を漢字音で解いたとんでも本を送ってきた人である。今回の文書の一つは、報道の日本語の誤り数点をあげて大新聞社・日本放送協会に正しい使用を要請したものである。その中に、「不手際があった可能性」「競合脱線の可能性」「トキ　新たに卵３個　無精卵の可能性大」などの「可能性」を誤用とすることがあった。

いまひとつは、学生時代に夏目漱石の演習のために読んだ彼の逸話のおぼろな記憶である。どの学校でのことだったろうか、“possibility”と“probability”の違いを、漱石は「自分がそこで逆立ちをすること」で説明し、その possibility はあるが、probability はない、と言ったのだったと思

う。逆立ちすることはできるが、教室で実現する見込みはない。漱石はそう言いたかったのだろう、とわたしは理解したのである。記憶にも理解にも自信がもてないうえに、著者も出典も忘れたので、最新の岩波書店版全集を別巻「漱石言行録」まで通覧したのだが、ついに見つからなかった。

それ以来、わたしはこの両語に対応する日本語「可能性」「蓋然性」を使いわけるように努めてきた。漱石の説明についての理解が正しかったら、前首相の話を紹介する日本語の実態はそれと異なり、I氏の主張にも正当性があることになる。

「可能性」が日本語の歴史に初めて登場したのは、井上哲次郎『哲學字彙』(1881)らしい。同書から「可能性」とその周辺の語を少し抜きだすと、次のとおりである。

Possibility　可能性　　Virtual　可能
Probability　蓋然性　　Probable　蓋然

西洋文明を受容するために先覚が漢語操作に苦闘して得た成果である。これには先行業績を参照しなくてはならないが、幕末・明治維新の英学文献の博捜は手に余るので、柴田昌吉・子安峻『附音圖解英和字彙』(1888)を見るにとどめる。

Possibility　可能(アタフベキ)コト、可成(デクベキ)コト、可能性
Probability　或(アルヒ)ハ有(アル)コト、實(ジツ)ラシキコト、蓋然性

同書は『附音挿圖英和字彙』(初版1874)の第二版であるが、初版の訳語二つの次に、「可能性」「蓋然性」をそれぞれ付加する形で載せたものである。これを見ると、『英和字彙』第二版が『哲學字彙』の成果を早速摂取したことがわかる。

Possibility の訳語「可能性」は、「あたふべし」にあてた漢語「可能」の音読みに由来する。中国にも同じ文字列の語はあったが、用例が少なく意味も異なるので、英語の翻訳に際して作られた日本製漢語らしい。Probability の訳語「蓋然性」も同様である。

この両語を、日本人がいかに理解し用いたか知りたいのだが、それは容易なことではない。さしあたり、徳谷豊之助・松尾勇次郎『普通術語辭彙』(1905)の説明を見よう。

可能性とは(第一)或物がまだ実現でないことを意味し、(第二)には、仮令或物が現実的存在を有して居ても、其の存在には、原因的或は合理的必然性を缺いで居(ママ)ると云ふ意義に使用せらるゝのである。(以下略)

蓋然性といふのは、全然信ずる程確実ではないが、併し全く疑ふべきものでもなく、寧ろ傾向より謂へば信ずべきもの多しと謂ふ意を表はす言葉である、（以下略）

「可能性」の第一以外はわたしには難解であり、「可能性」が「可能」の意味から離れはじめているようにも見える。哲学用語としてはアリストテレスに淵源するこの両語を、多くの日本人が右の定義どおりに用いたわけでもあるまい。そして年月がたつうちに用法に差の出てくることは当然である。その状況を国語辞書の記述からたどってみる。

大槻文彦『言海』（1891）に附載された「語法指南」では、助動詞「る／らる」の意味を「能力」としている。山田美妙『日本大辭書』（1896）は両語をのせず、落合直文『ことばの泉』（1901）は文法用語「可能法」だけをのせる。上田萬年・松井簡治『大日本國語辭典』（1915）は文法用語「可能法」をのせ、「蓋然性」には〔哲〕として、『普通術語辭彙』に近い記述がある。落合直文『言泉』（1921）は両語をのせ、「可能性」には、㈠として哲学用語の記述、㈡として「現在は巧みならざれども、行へば巧みになる性質」の記述があり、「蓋然性」は哲学用語としての記述だけである。金澤庄三郎『廣辭林』（1925）は、ともに哲学用語と表示せず、「可能性」に「出来得べき性質」、「蓋然性」に「かくあるならんと見込まるゝ性質」と記述した。

なお、アーネスト＝サトウ“ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY OF THE SPOKEN LANGUAGE”第三版（1904）の訳語は、Possibilityが「なるたけ、できるだけ」、Probability が「みこみ、おそれ、もよう」である。サトウは実に的確に日本語を捉えていたのである。

以上、両語が成立してから四十年間の辞書の記述をあらあらたどってみた。これによると、『ことばの泉』『大日本國語辭典』の文法用語「可能法」、『言泉』の㈠と『廣辭林』の「出来得べき性質」は、いかにも自然な理解の経過を語っていると言えるだろう。

「可」「能」ともに日本人ならその意味を容易に喚起しうる漢字なので、「可能性」は語構造が明瞭で透明度の高い語だとわたしは思う。だから、哲学とは無縁な人々もこの文字の意味を理解して広まったのだろう。その透明さは、例えばヴォイスで対応する「壊す」「壊れる」による各種の可能表現を比べるとよくわかる。

○壊せる・壊すことができる・壊すことが可能であ

る・壊す可能性がある
＊壊れられる・壊れることができる・壊れることが可能である・壊れる可能性がある

「壊れる」の可能表現は、よほど特殊な条件がなくては成立しない。それで全部にアステリスクが付くが、現実には「壊れる可能性」式の日本語が氾濫しているのである。わたしの母語感覚は右のとおりだが、最近、モダリティー論の専書で「一歩も前に進めない可能性が高い」という記述に遭遇した。これを工藤流に翻訳すると、「一歩の前進も不可能な可能性が高い」となる。奇怪な日本語というほかない。

つづけて現行の辞書の説明を見よう。初めに『新明解国語辞典』初版（1972）。

蓋然性　十分に起こりうることとして期待されること。〔確率は、これを数量化した物〕たしからしさ。

可能性　㈠十分に起こりうることとして期待される・こと（度合）。〔俗に、蓋然ガイゼン性の意でも使われる〕㈡将来どんな事まで実現しうるか、ということ。「―〔＝どこまでやれるか〕を試す」

次は『岩波国語辞典』第三版（1979）。

蓋然性　その事柄が実際に起こるか否か、真であるか否かの、確実性の度合。また、蓋然的であること。▽これを数量化したものが確率。

可能性　それが可能だという性質・度合。「―が高い」▽日常語では多くそうなる見込みの意に使う。

最後に『国語大辞典言泉』（1986）。

蓋然性　何事かが起こり得る確実性の度合い。また可能性の程度。確率。

可能性　物事が実現できる見込み。また、ある条件のもとで何かができるという要素。「成功の可能性はゼロだ」「自分の可能性を試す」

規範と実態のいずれに重心を置くかで記述態度は微妙に違う。三書の「可能性」の記述はわたしの理解にほぼ近い。それに、『新明解』の「俗に云々」の記述がわたしの語感に合致し、『岩波』の▽以下の記述も実態を捉えていると思う。『言泉』が「蓋然性」の語義記述に「可能性」を用いているのは、実態を反映させたゆえだろうか。それなら、「可能性」の記述にも同じ態度を採るべきであったと思う。

『日本国語大辞典』第二版（2001）で両語とその周辺の

語を検すると、漱石門下の寺田寅彦の名がめだち、用例「無意味の中に潜んだ重大な意味の可能性は葬られてしまふのである」「状袋の宛名を書いてやったといふ事も随分可能で蓋然であるやうに思はれた」「事柄の可能不可能や蓋然性の多少を」を掲げている。初めに挙げた漱石の逸話と何か関わるのであろうか。そこで岩波文庫の『寺田寅彦随筆集』を斜めに読んでみると、かなりの用例が得られた。そのうちの三つをひく。

先生と弟子が同じ病気にかかる確率（プロバビリティ）は全く縁のない二人がそうなるより大きいかもしれない。（第一巻 p.117）

おそらくこれはいくらでもできる可能性があるのであろう。（第二巻 p.279）

役に立つような若干の暗示が生まれうるプロバビリティがあるかもしれない（第三巻 p.202）

科学者にして随筆家として著名な人らしく、わたしがいぶかしく感じたものはない。

寺田寅彦門下の中谷宇吉郎が師匠の言動を叙述した箇所にもそれが見える。「先生は、いつか小宮さんがいわれたように、綜ての可能性（ポシビリティ）を考えて見られるのが得意でもあり」（『中谷宇吉郎集』第一巻 p.159）、「「君、あの階段の磨り減り方がプロバビリテイ曲線になっているなあ」と額を指差しておられる。」（同 p.163）などが拾える。寅彦はこれらをよほど厳密に使いわけていたのではなかろうか。

朝日新聞朝刊（2004.12.26）の「スギ花粉症　厳戒」と題する記事は、副見出しを「来春飛散量、最大級の恐れ」とし、本文には「来年の飛散量は過去最大級になる可能性」「観測史上最大だった95年を上回る可能性もある」と書いている。飛散がなぜ「恐れ」になったり「可能性」になったりするのだろうか。同紙（2005.2.13）の署名記事中の「金融システムが全国規模で揺らぐような危機が来る可能性」は、「危機」と「可能性」が一文に共起した例である。「大クラゲ退治作戦」（同紙2005.9.4）は、副見出し「一網打尽＋一刀両断／水産庁が実験」をもち、本文には「切断されるとそのまま死ぬ確率が高い」「半分に切断すれば死ぬ可能性が高い」とある。ここでは明らかに「可能性」が「蓋然性」の領域を犯している。

天災を歓迎する人はないと思うので、「台風が上陸する可能性がある」は困る、とわたしは前稿の終わり近くに書いた。パキスタン地震に関する報道（同紙2005.3.13）で、

第一面に大統領報道官の談話「（全国で）死者は千人以上にのぼる可能性がある」、日本人の死者が出た高層アパートの崩壊について「構造に問題があった可能性」の文言が見え、第三十五面には「死者が千人以上に達する恐れもある」とする。「可能性」と「恐れ」は漢語と和語の違いでもある。第一面は硬く、三面記事は軟らかく書く方針なのだろうか。

少女の誘拐事件において無事の救出が難しい状況で「殺害された可能性がある」というのは以ての外だ、とわたしの母語感覚は囁く。九月、根室沖で日本のサンマ漁船が転覆し、数人の乗員が落命した。十月一日のラジオのニュースは、漁船にイスラエル船籍のコンテナ船の塗料が付着していたことを述べ、この船が「衝突した可能性がある」と報じた。翌日の朝日新聞にも「同船と衝突した可能性が強いとみられる」とあった。そこまで証拠があるのだから、日本の報道なら「衝突した疑い」とすべきではではなかろうか。

最近発覚した、建築物の耐震強度偽装事件の報道において、放送は「建物が倒壊するおそれ」で一貫していたのは適切だと思う。だが、讀賣新聞には、「「上の階が落ちる可能性がある」という専門家の指摘」があった（11.29）

報道者は己れの立つ位置から発する最適の表現を選ぶべきであって、「可能性」一語で済ませては怠惰の謗りが免れえないだろう。九月十一日午前、テレビ朝日の『サンデープロジェクト』で、イラク戦争とハリケーン被害が米国政権に及ぼす影響について、東京の田原総一朗氏と米国にいる田端正記者のやりとりを聞いた。田端氏は「イラク戦争とハリケーンの被害がリンクするカノウセ、……予想が云々」と伝えた。点線部では口をつぐんだのである。田端氏は「可能性」と言いかけ、それを途中で訂正したようだ。表現内容への配慮がはたらいたに違いない。これこそあらまほしき態度である。

いま「蓋」は見ること稀な文字である。そこで「蓋然性」を用いるべき文脈にも「可能性」を当てた、これが当用漢字以後の実情なのだろう。「蓋然性」は早く専門語に固定し、「蓋」が当用漢字からも除外されたからといって、すべてを「可能性」で代替するのは怠慢である。そこで日本語表現を救う道は類義語をうまく使いわけることである。

近年の類語辞典で最も使いやすい柴田武・山田進編『類

語大辞典』（講談社 2002）を見る。その「1512　見込む」の「名詞の類」の記述の要点、「●可能性」条の説明と用例を、見やすい形にしてひく。

●見込み［見込み　見通し　当て（十一語略）見積り］
●可能性［可能性　公算　蓋然性　確率］
●うまくいく見込み［成算　勝ち目　勝算　脈　将来性］

可能性　ある状態や結果につながる見込みの度合い。「この馬が勝つ可能性は決して低いとはいえない」「子供は無限の可能性を秘めている」

公算　ある事柄がどの程度の確実性をもって起こるかの度合い。「そうなる公算が高い」

蓋然性　文章語。ある事柄が実際に起こるかどうか、本当かどうかの確実性の度合い。「機能障害を引き起こす蓋然性が高い」

確率　ある具体的な状態や結果になりうる度合い。「雨の降る確率は20％です」「一等が当たる確率は、きわめて低い」▽確率予報。◇数値で表されることが多い。

「公算」「蓋然性」「確率」はいずれもプロバビリティー（probability）の訳で、この順に訳語として新しくなる。

この辞典は実態尊重の方針を採ったようである。「可能性」の用例は適当だと思うが、語義記述に従うと「少女が殺害される可能性」もよいことになるが、それでよいのだろうか。かかる事態には、本辞典「1503　気になる」の「名詞の類」に［不安］［心配］があり、［恐れ］には用例「二次災害が発生する恐れがある」「関東地方は大雨の恐れがあります」を挙げているのだから。

いかにも硬い表情を見せるこの漢語「可能性」を専門語として用いるまいとした言語学者がある。亀井孝氏である。氏は、漢語で埋まりがちな論文に柔らかな和語を用いて仮名を多用し、一読してその筆者とわかる独自の文体を生んだ。山田俊雄氏は亀井氏の遺著『ことばの森』の書評において、「特異な発語や接続詞」として、「あなたざまに、おのれ、うたた、そもそも、いっそ、いまさら、いとせめて、あっぱれ、…のタームズにおいて等々」と書き、「外国語（もしくは外来語）についての極めて潔癖で厳正な遣ひ方」としている（『成城国文学』十二号　1996）。その潔癖さの

極みといえるのが、「しかるべしさ」と「ありうべしさ」だとわたしは思う。

『亀井孝論文集』から、傍点も原文のままに用例をひく。

この解釈は、さきにとりあげたかなづかい書にみえるその反省記事によってもそのしかるべしさをささえられる。（論文集６ p.310）

わたくしは、つぎのようなばあいのそのありうべしさ（可能性）をみずからにたいし否定しがたい。（同３ p.407）

全六冊を通読した印象では、この二語は極くまれにしか現われないが、一度見ただけで忘れ難い印象が残る。第二例の括弧書きによって、「ありうべしさ」は漢語「可能性」を避けるための造語らしいとわかる。

そのようなこともともとよりありうべしさ（可能性）としてこれを否定することはできない。しかし、そのしかるべしさ（蓋然性）となると、わたくしにはもはやなんとも判定しがたい。（同５ p.93）

二語の共起した貴重な一文である。哲学にも通暁した亀井氏は厳密に使い分けているのだろうが、わたしにはその違いが判然としない。「蓋然的」の用例もある。

後世のかたちとの対応を考慮にくわえるならば、万葉集にただ一個しかかながきの例を得られない奈良時代に対しても、「ミツキ」のかたちを想定した方が蓋然的である。（同４ p.304）

この「蓋然的」は現行の辞書の記述に近く、「妥当性が高い」の意で解釈できる。すると、「蓋然性」は、中立的な意味の「可能性」と使い分けた、と言ってよいだろうか。

形容詞「悲し」の名詞形が「悲しさ」であるように、「しかるべしさ」は、「然有るべし」の縮約形「しかるべし」を経て作られた。「しかるべしさ」の基になった「しかるべしい」も見える（同４ p.290）。文語「しかるべし」のなごりとして、連体詞「しかるべき」、副詞「しかるべく」があるので、口語形は「しかるべい」のはずだが、語構造上、「～べい」の形は近代日本語に存在しにくい（拙著『日本語史の諸相』所収「中世形容詞の終焉」）。そこで、シク活用に移して造語したのだろう。同様に「ありうべしさ」は「有り得べし」の名詞形である。

「ありうべしさ」を「可能性」に対応させようと務めても、わたしはいつも混乱してしまう。「蓋然」を「蓋然（けだしし）るべし」に戻して理解することはできるが、「可能」からは

「ありうべし」の意味が喚起しにくいからだろう。「可能性」を和語に移すなら、「為し得る見通し」すなわち「なしうべしさ」が適切ではなかったか、とわたしは考える。亀井氏はむしろ「可能性」使用の実態を踏まえて和らげたのだろうか。

亀井氏の遺著の書評者山田俊雄氏には、近代日本語、なかんづく語詞に関するあまたの論考があるが、可能性・蓋然性への言及は見あたらない。去りし夏に氏は長逝し、この両語についての見解を承る機会を永久に失った。それが心残りの一つであることを記して、本稿を氏のみたまに捧げる。

（二千五年冬）